

松岡 亮介¹⁾²⁾、市川 千宙¹⁾、山下 大祐¹⁾、伊藤 智雄²⁾、今井 幸弘¹⁾
(神戸市立医療センター中央市民病院 臨床病理科¹⁾、
神戸大学医学部附属病院 病理診断科²⁾)

【症例】

患者は61歳女性。心窩部痛にて他院受診。精査の結果、肝臓に腫瘍を認めため当院消化器内科紹介。精査の結果、肝S4/5にかけて50mm大の単発の肝細胞癌と診断され、腹腔鏡下肝腫瘍核出術が施行された。

【肉眼所見】

腫瘍は5.0x4.5x4.0cm大。剖面では分葉状の境界明瞭な白色充実性腫瘍で、内部には黄白色調の領域や、暗褐色調の領域を伴っていた。

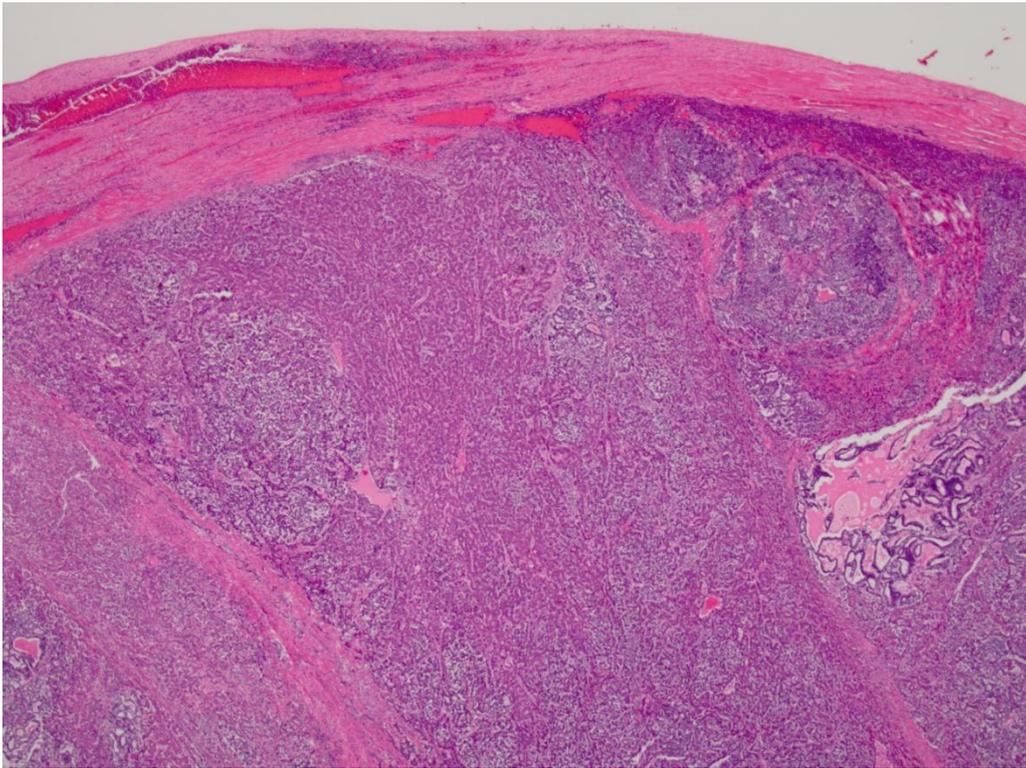
【病理所見】

組織学的には、肝臓は肉眼での病変の範囲にほぼ一致して、線維性被膜ないし線維性隔壁に覆われた境界明瞭な腫瘍が認められ、辺縁には壊死巣や出血を伴っていた。腫瘍細胞は多彩な組織像を示し、好酸性胞体を持つ腫瘍細胞が索状構造や偽腺腔構造を呈し増殖する部分、類円形、橢円形核を持つ腫瘍細胞がスリット状の血管を介し充実性に増殖する部分、類円形、橢円形核を持ちN/C比の高い腫瘍細胞がリボン状、管状、ロゼット状に増殖する部分、核腫大や偽重層化を呈する高円柱状腫瘍細胞が管状ないし篩状構造を示す部分、間葉系細胞を思わせる紡錘形細胞が類骨形成を伴って増殖する部分がモザイク状に混在していた。髄外造血の像も認めた。

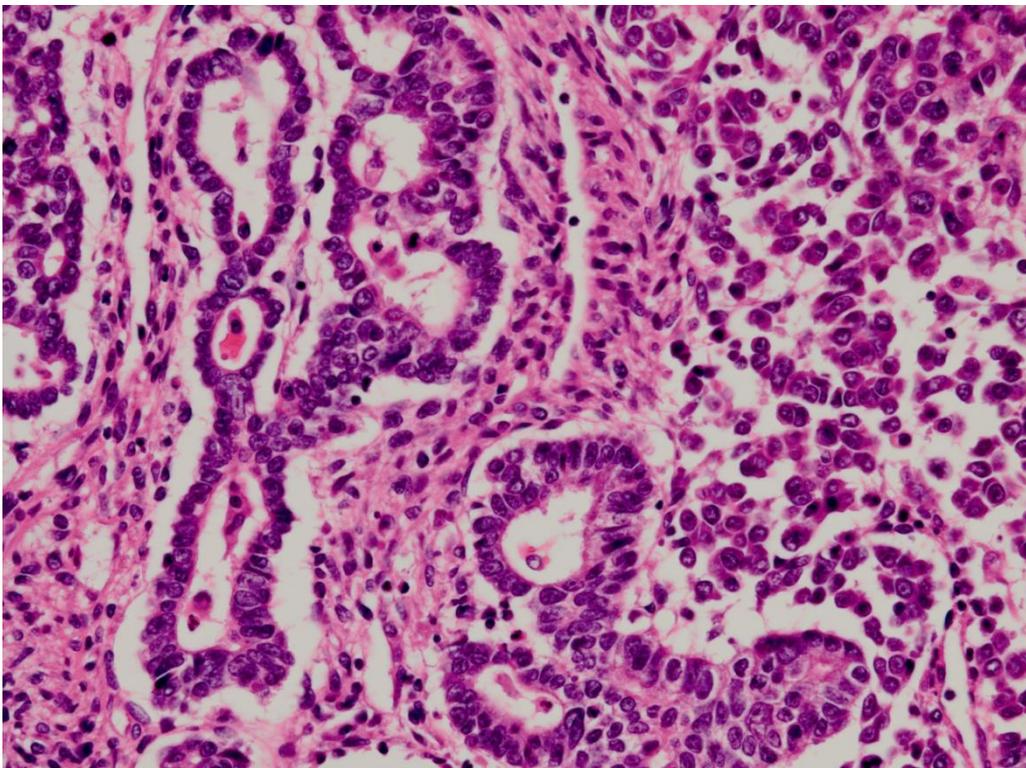
免疫染色では、HepPar1が陽性となる部分、synaptophysin・nCAMが陽性の部分、CEA・CK7陽性の部分が混在していた。紡錘形細胞はcytokeratin陰性であった。

【配布標本】肝腫瘍核出標本の一部。

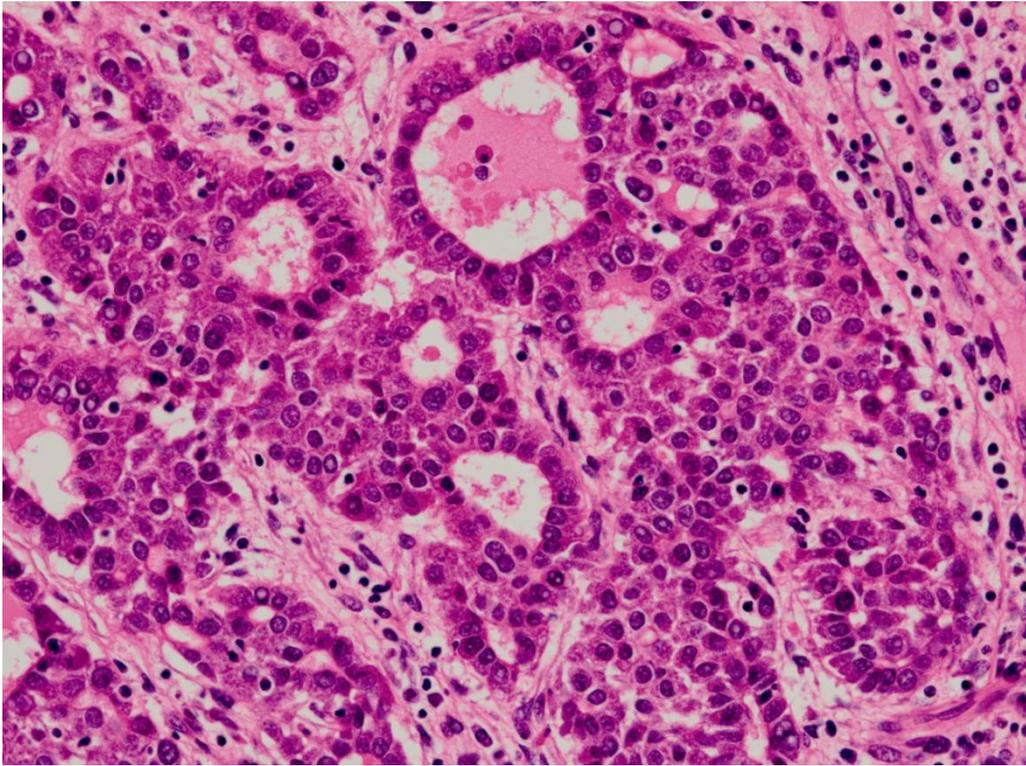
【問題点】病理組織学的診断



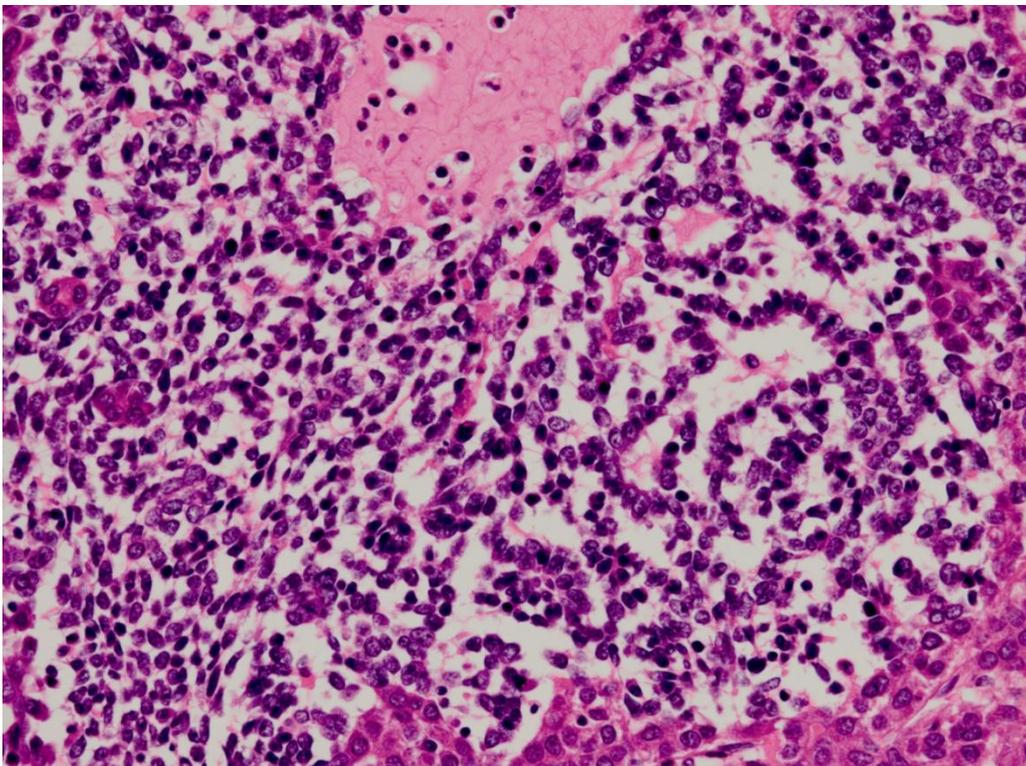
HE1



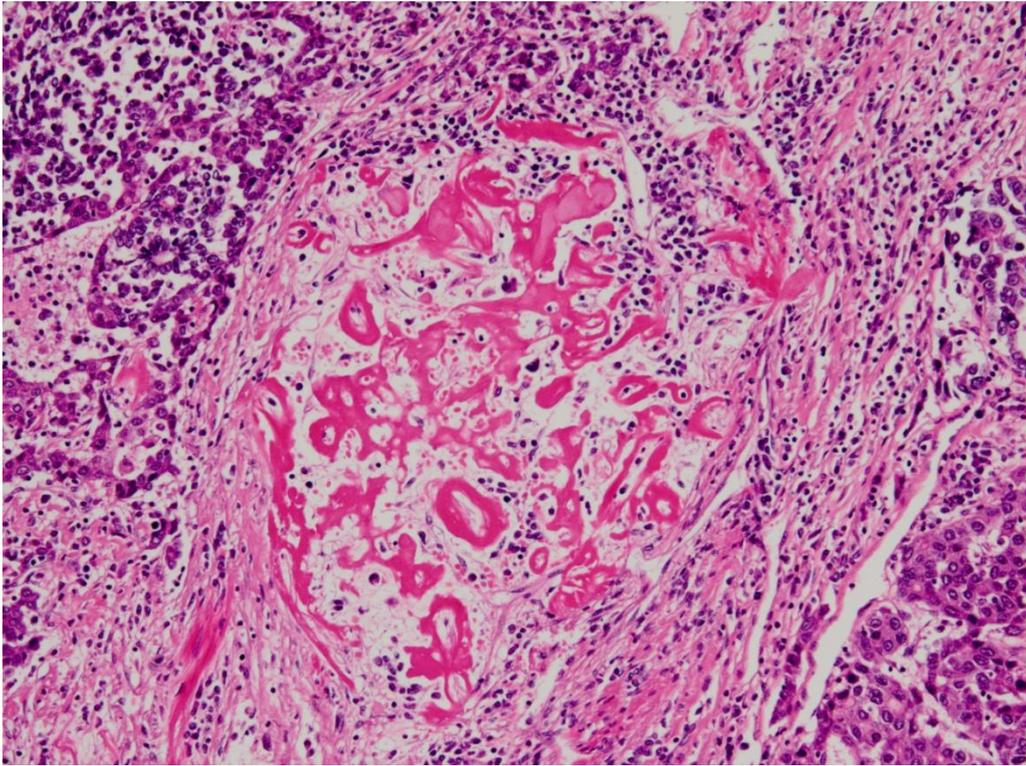
HE2



HE3



HE4



HE5